

のほとんどはクロボク土と分布が重なります。

近世には田畑の肥料として山野の草や若い枝葉が盛んに利用されました。「善光寺道名所図会」にもその様子が描かれています。こうした草地からワラビなどの山菜をとって利用することも行われました。開田高原などの馬産地では、放牧地やまぐさを採るための採草地を維持してきました。

伝統的な半自然草原は現在、全国的にも貴重な自然と文化の複合遺産となっています。草原の景観や草の利用を地域資源として活用する取り組みがはじまっています。

当日のご質問のひとつに、縄文人は何のために火入れをしたのかというものがありません。当時の植生の変化などの状況からみて、食料の得やすい環境を



木曾馬（開田高原 木曾馬の里）

つくりだすためだった可能性があります。このほか家の近くの草地にアズマギクやオキナグサが咲いていたというご幼少時の思い出など、貴重なお話をうかがうこともできました。（須賀 丈）

第3回 信州の地学遺産とジオパーク

7月9日

長野県は山の国です。山があるということには、そのこと自体に大変大きな意味があります。そしてだからこそ、長野県に数多くの地学遺産があります。ところで「地学遺産」って何でしょうか？

当夜の話は、まず飯綱町にあるひとつの大きな岩から始まりました。その名は「舟石」。その1個の巨石が一体どういう意味をもっているのかを自然科学的な観点や人文科学的な視点からいねいにひもといてゆくと、それが後世に伝えていくべき価値のある大切な遺産であることがわかってきます。その場合の地学遺産は、ただの「珍しさ」だけではなく、地域の風土や産業や歴史や生きものなどの様々な要素との豊かな関係性をもっています。そのように長野県の自然をみてゆくと、信州は地学遺産の宝庫であることに気がつきます。

さて、近年「大地の公園」ともいわれるジオパークへの取り組みが盛んになっています。全国的にもジオパークが増え、長野県でも南アルプスジオパー



特異な形の戸隠の岩山

クや、苗場山のジオパークへの取り組みがあります。ジオパークとはどういうものなのか、そして類似の取り組みとして、エコツアーやエコミュージアムについても紹介し、それらの違いと共通点などをお話しました。

ジオパークは、これまであまり関心が向けられなかった地学現象をとりあげ、それらを活用して地域を元気にしていく取り組みとして注目されています。